

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520410

研究課題名(和文) 海外紀行文の総合的研究 視覚的想像力の諸相をめぐって

研究課題名(英文) The Study for Japanese Oversea Travel Writing:How think about Visual Imagination

研究代表者

中川 成美 (NAKAGAWA, Shigemi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70198034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：近代以降、日本人の海外渡航に伴う紀行文、旅行記、旅行日記などは膨大な量に及ぶ。本研究ではその堆積を基礎に、日本人が残した海外体験の実相を追及するとともに、そこには異文化への興味を媒介とする自己の相対化が断行されていたことが了解される。それはまた歴史的な事象によって変転する自身の運命との対峙ともなっている。移民や戦争によって戦地に連れ去られる兵士など、日本人が経験した多様な海外体験は膨大な記録となつて積み重ねられているが、その殆どが忘れられている現状を鑑み、それらの資料の発掘と、別の視点からの照射は、あらたな文化研究を拓いていくものと考えている。

研究成果の概要(英文)：After Meiji era, There are lots of oversea travel writing which include travel memories, travel diary. This study aims to analyzing the experiences of Japanese overseas travel. Specially I picked up the view of immigrants and soldiers that express as the historical matter. We focus the alternative side in travel writing as cultural studies.

研究分野：日本近現代文学・文化

キーワード：トラベルライティング 旅行記 海外体験 異文化理解 移民 戦争 観光 文化研究

### 1. 研究開始当初の背景

近代以降、日本人の紀行文、旅行記、旅行日記などは膨大な量に及ぶが、小説や詩歌などに比較して低位のジャンルとして曖昧なままに放置されてきた。本研究は、その堆積を基礎に、日本人が残した紀行文、特に海外体験の記録であるトラベルライティングを中心として、その実相を追及するとともに、異文化への興味を媒介とした自己表出とその相対化が断行されていたことを、主たる分析点として出発した。当該分野では観光学や社会学で主たるテキストとして取り上げられるが、文学研究では『紀行文』というジャンルに繰り入れられてこれまで検討が施されてきた。そして、専ら文学者の書く紀行文を中心に検討がなされてきたが、本研究ではこれまで周縁とされてきたテキストにも目を注ぎ、実体験のみならず明治期には多く書かれた仮想旅行記なども対象としていくこととした。対象地域、年代は特にきらずに近代以降の言説に現れた海外紀行を幅広く取り上げていくこととした。

### 2. 研究の目的

近代以降の急激な西欧近代の摂取は、日本人にとってそのメンタリティを形成していく重要なファクターとなった。海外体験は日本人に独自の価値と認識を付与したと言える。しかしながら、西欧中心主義、すなわち植民地主義や帝国主義が非西欧圏に注ぐまなざしは偏波であり、アジア圏における近代化問題は、一方において覇権の奪取と確立がそれぞれの国々の課題となって、19世紀の版図を形成していった。明治期に日本においてフィリピン独立戦争や、朝鮮半島における近代化政策、中国清朝の衰退などが、日本にあって熱く語られたことからわかるように、近代化を迎えた日本が、熱く西欧世界を観察し、同時にアジアを相対化しつつも（近代化への急速な接近を図りつつも）、アジアへの限定的な視線を注ぎながら、覇権の重要性を認識していったのである。

その際に大きな力となったのが、情報としての西欧であり、またアジアの鬱屈を反発しながらも共有する思考のあり方であろう。近代初期の海外トラベルライティングが、単なる「物見遊山」にとどまらず、日本人という国民国家の成員として自覚を促し、同時に見るべきものを貪欲に探索する独特の西欧文化受容のひな型をつくっていったのは、近代化過程の必然として銘記すべきであろう。そして世界に拡散していく移民、また近代軍事国家の命題を踏襲した日本が国民皆兵制のなかで、多くの兵士たちにおそらくは彼らが見ることの機会すらなかったであろう多くの「外国」を見させていったのだ。

このように日本人が経験した多様な海外体験は膨大な記録となって積み重ねられているが、その殆どが忘れられている現状を鑑み、それらの資料の発掘と、別の視点からの

照射は、あらたな文化研究を拓いていくものと考えている。

### 3. 研究の方法

研究方法については(1)文献の収集と分類(2)現地踏査とフィールドワーク(3)資料の分析と理論構築(4)国際会議の開催(5)共同討議と論文執筆の5つに尽きるであろう。文献の探索は必須であり、これについては基礎データベースを作成した。この分野は大量の書籍や記事が生産されているが、それらはこれまで旅行とか観光とかの分野に固定化されて読まれてきた。これをトラベルライティングというフィルターから再見していくことが必要である。

広範に書かれた文献には想像のものを含めて、具体的な土地や地域、建物や産物の名前が出てくる。これらを現地調査して、実感的な理解をすることは、この研究の基礎と言える。また『機構』という言葉で説明したように、このトラベルライティングには、新たな枠組みと論理的なバックアップが要求される。それについても考えていきたい。

国際会議の開催は双方向的なテキストの交歓を目指すうえではもっとも有効に機能するかと考える。国際的ネットワークをつくっていきたい。往々にして日本人の海外記録を読んでいく場合、どうしても日本人が書いたものですべてを説明しようとする傾向があるが、同時空間で相手側にある記録・記憶をどのように日本人のテキストに反映させていくかは、今後の本研究にはもっとも重要なものになるであろう。そのためにも双方向的なネットワークの構築をめざさなければならない。幸いに多くの海外の日本研究者が、本研究に関心を寄せてくれたことは非常にありがたいことであった。その上で、今後は基本的な理論書と、このジャンルについての一般向きの読み物が必要となる。論文発表、また単行本の出版に力を傾けたい。

### 4. 研究成果

(1) 科研費研究第一年度にあたる平成24年度では、以下の調査と研究を行った。この年はアジア圏を中心とする日本人渡航記録を中心に、それらとの往還関係を調査する予定とした。平成24年6月15日から18日まで、タイ王国にてチュラロンコン大学ナムティップ・メサイト講師と共に、タイにおける日本人旅行記についての調査を行った。なお、ナムティップ氏は日本人がタイを描いた文学作品について研究をしているタイ人研究者である。

9月8日から23日まで、パリ第7大学で博士論文審査に招かれたこともあり、次年度に予定していたフランスでの調査を前倒して実行した。フランス、特にパリは日本人の憧憬の地として現在に至るまで文化的機能を果たしているが、1920 - 30年代パリに同時空的に滞在した「パリの外国人」という視点か

ら、この爛熟期のパリにおける文化摂取と文化交流の問題を考えるための調査をした。主に国立ミッテラン図書館、第7大学図書館にて文献調査、またモンパルナス周辺を中心にフィールドワークをした。

11月29日から12月3日まで韓国・東国大学にて開催されたメカデミア世界大会に出席・発表の折に、統治期を中心とするソウルのフィールドワークを行った。平成27年3月には、釜山にて同様にフィールドワークを行ったが、統治期に形成された日本人街と植民地様式の建造物について興味深い調査ができた。

翌25年2月には立命館大学土曜講座で「トラベルライティングの世界」というタイトルで、社会人向け講座を開催した。私は2月23日に「旅する視覚」というタイトルで明治期の身体感覚と観光の関係について講演した。

3月26日、27日にはこの研究プロジェクトの概要を告知するための目的も併せて、国際ワークショップを開催した。「トラベルライティングという領域」という総題のもとに、木村朗子氏（津田塾大学）、マイケル・クローニン氏（ウイリアム&メリー大学）、温又柔氏（作家）、久保田裕子氏（福岡教育大学）らと、立命館の大学院生、教員、客員研究員などが集まり、トラベルライティングの比較的研究発表、および討議をおこなった。また明治期以降の海外紀行文のデータベースを作成、および関連資料の収集を行った。

(2)平成25年度前期は主に文献資料の分析を行った。明治期の海外情報として雑誌『太陽』『彙報』欄や博文館系の雑誌による写真情報、また戦況情報などのメディア媒体があったが、それらと同時代の文学作品は明らかになつながら見出せる。また海外渡航も船や鉄道などの急速なインフラ整備によって旅行産業が発達する。そうした状況が、日清、日露戦争と相関しながら進行していくさまが、トラベルライティングの分析から浮上してきた。

25年10月15日から21日までポルトガルのマデイラ島にて開催された国際カンファレンス「災禍の記憶」にて発表した。人間の移動を促すもっとも大きな理由である災害を見据えて、その災禍の記憶をどのように留めていくかについてが、ここで話された。もちろん、日本で3・11を直接の契機として開催された会議であるが、この災害による強制的な移住、移動もまたトラベルライティングのコンセプトにとって重要な要素の一つである。続き、多和田葉子氏、そしてスイス人作家イルマ・ラクーサ氏を招いた講演会「海へ言葉と境界を越えて」を11月6日に開催した。旅の記憶をテーマに書き続ける多和田氏の仕事は、まさしくトラベルライティングが持つ内的喚起力の問題を考える上に好適な素材であるが、多和田氏、そしてハンガリーからの移民であるラクーサ氏がドイツ語をもって創作活動をする事の「意味」を

考えることとなった。19世紀から20世紀に断行された世界規模の人類の移動は、まさしくトラベルライティングをうながすものとして、その実体を把握していかなければならないことが、ここでよく了解された。

翌平成26年3月7日には国文学資料館との共催で明治期のトラベルライティングを考えるワークショップが、大学院生を中心にもたれた。明治期の想像力に潜む近代観が非常に興味深かった。このほかには基礎データベースの作成を行った。

(3)平成26年度は、最終年度に該当していたため、フィリピン調査、パリ調査、また複数の海外学会での発表、国際シンポジウムなどを年度当初に企画した。

7月3日にケンタッキー大学のダグ・スライメーカー氏を招き講演会「Paris Mon Amour 藤田嗣治・金子光晴らのパリ体験」を開催した。フランスでの日本人がもった独自の文化波及とその摂取、同時にそれらが混濁して戦間期のヨーロッパと日本の落差を生じさせて云った点が興味深かった。

10月に胆嚢結石による胆嚢全摘手術を受け、また老親の介護もあり、後期に予定していた事業・調査がまったくできなくなってしまった。予想外のことで10月のパリ出張、12月のフィリピン調査、また27年1月を予定していたブラジル・サンパウロ調査、国際会議開催のすべてを断念せざるを得ないこととなった。わずかに、27年3月27日にアメリカ・シカゴにてアメリカアジア学会（AAS）に出席、「Nuclear as a gesture: Yoko Tawada's The Lantern Keeper」の発表をした。前記多和田葉子氏の3:11を素材とする作品『献灯使』をとりあげて、そのトラベルライティングとしての想像力の強度について話した。

(4)上記の理由を以て、一年間の延長を申請して受理された。前記には大学院生を中心に授業を含めて、トラベルライティングの機構という概念について、事例研究を重ねた。また副次テキストとして処理されがちなトラベルライティングを、文学作品と並置することによって生じる文学的想像力の問題について、基礎理論の構築を目指した。

12月11日から15日までフィリピン調査を遂行することができた。市内のホセ・リサル記念館、国立歴史資料館、またカビデ州のエミリオ・アギナルド記念館などの調査と、フィールドワークを行った。続いて12月24日から1月1日までパリにてモンパルナスの再調査、および国立シネマテークにて明治期の日本人の映像記録の調査をした。1月2日から8日までサンパウロに赴き、日本人移民史料の調査をサンパウロ人文科学研究所、サンパウロ大学にて行った。ここでは家族移民であった、画家・半田知雄の手稿を中心に、日本人移民のトラベルライティングの調査をすることができなかった。1月30日には台湾原住民問題に集中したワークショップを開催

した。出席者は西成彦氏（立命館大学）、呉佩珍氏（台湾政治大学）、ロバート・ティアニー氏（イリノイ・シャンパーニュ大学）である。この年、6月のAAS Asia（同志社大学にて開催）にて発表する予定である。

2月21日、林芙美子の会第1回研究集会「林芙美子と旅」を立命館大学末川記念会館にて開催された。ここで中川は「林芙美子のトラベルライティング」、鳥木圭太氏は「女性作家の見た 外地 林芙美子と佐多稲子」を、また作家である大田治子氏による「林芙美子の愛のゆくえ」が、口頭発表された。林芙美子は中国、東南アジア、ヨーロッパなど多くの旅の足跡をその生涯に残したが、その目的は観光、遊学、戦地慰問、戦地報告など多岐にわたる目的を伴っていた。トラベルライティングを考える上に格好のテキストを多く残したことから、この作家をその側面から探求した研究集会となった。

3月22日、23日には国際カンファレンス「トラベルライティングという機構 他者への視線」を開催、呉佩珍氏、西成彦氏、劉建輝氏（国際日本文化センター）、玉野井麻利子氏（UCLA）、陳健氏（国文学資料館）らと、大学院生の参加によって開催した。ここで、トラベルライティングという機構そのものが持つ多義的、多岐にわたる効果について話し合われた。戦場の兵士や、引き揚げの母親、移民船の子供たち、あるいは戦時慰安婦、難民や亡命者など大量の移動する人々によって紡がれたその記録の記憶を、これからのように保護、伝達していくかが今後の我々の研究に課せられていることを実感した。この総括をもって、4年間の科研による研究プロジェクトを閉じた。

また基本データは明治期を中心として作成されたが、今後も継続してデータ完成を目指したい。

最後に本研究がもし何らかの価値を持つとしたら、「トラベルライティング」という聞きなれない言葉（ターム）を幾分かは伝播したところにあるように思う。かつては紀行文や旅行記というふうに概括されてきた二次テキストと考えられてきたジャンルを開放して、一方にそのジャンルが潜在的に持つ視覚的な力について今後も研究を深めていきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

中川成美、「林芙美子の詩的精神 抒情の発見」、『現代詩手帖』、2014年4月号、2014年、査読なし、78 - 82

中川成美、「生きることの自責 原爆文学を考えるー」、立命館大学『言語文化』、25巻2号、2014年、査読あり、39 - 42

中川成美、「SF的想像力と文学 笹野頼子の冒険」、『論究日本文学』、99号、2013年、

査読あり、1 - 14

〔学会発表〕(計 5 件)

中川成美、「トラベルライティングというジャンル設定について」、国際シンポジウム「トラベルライティングという機構 - 他者への視線」、2016年3月23日、立命館大学（京都府京都市）

中川成美、「林芙美子のトラベルライティング」、林芙美子の会第1回研究集会、2016年2月21日、立命館大学（京都府京都市）

中川成美、「nature as a Problematic concept in Japanese Literature: Looking for Reality」ベネチア大学国際シンポジウム Rethinking of nature、2014年3月17日、ベネチア大学（イタリア・ベニス）

中川成美、「見える風景・見えない風景 カズオ・イシグロと原爆文学」、『日本比較文学学会関西大会』、2013年11月16日、徳島大学（徳島県徳島市）

中川成美、「The repetition and Recurrence of disaster」、2012年12月1日、mechademia ソウル大会、東国大学（大韓民国・ソウル）

〔図書〕(計 1 件)

中川成美、「支配の言葉・融和の言葉 日本語文学という概念をめぐるー」郭南燕編『バイリンガルな日本語』所収、2013年、三元社、448(292 - 309)

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

中川成美、「忘れられた記憶 戦争の文学再読」、『京都新聞』2014年10月6日から2016年3月28日まで毎週月曜日朝刊に連載、全58回

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

中川 成美 (NAKAGAWA, Shigemi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70198034

(2)研究分担者  
( )

研究者番号：

(3)連携研究者  
( )

研究者番号：